



グラミン銀行総裁、経済学者

**Muhammad Yunus**

去る7月11日、立教大学で開かれた「21世紀の日本の若者へのメッセージ～グラミン銀行の経験から～」と題した名誉博士学位授与記念講演会終演直後、拍手で見送られるユヌス氏。



# 地球の将来像を考えよう

## ムハマド・ユヌスのメッセージ

貧困に苦しむ人々に「マイクロクレジット」と呼ばれる少額の無担保融資を行い、それを手元として小さなビジネスを開始させ、経済的な自立を支援する――。

この画期的な手法によって貧困の撲滅にめざましい成果をあげているのがバングラデシュのグラミン銀行だ。

その功績に対して同行と創設者で総裁のムハマド・ユヌス氏が2006年度ノーベル平和賞を授与したことは記憶に新しい。

国際的に幅広い活動を続けるそのユヌス氏が7月に来日した。

立教大学で開かれた名誉博士学位授与式にもなって催された

記念講演と質疑応答で発せられた言葉にリンククラブ独自のインタビューを織り交ぜ、私たちに向けたユヌス氏のメッセージを届けよう。

グラミン銀行総裁。経済学者。1940年、 Bangladesh の第二の都市チッタゴン生まれ。チッタゴン大学を経てダッカ大学経済学部卒業。1961年同大学大学院にて経済学修士号取得。経済学講師を4年間務めたのち、フルブライト奨学金を得て米国バンダービルト大学留学。1969年同大学にて経済学博士号を取得。1969～1972年、ミドルテネシー州立大学経済学部助教授。Bangladesh 独立後の1972年に帰国し、チッタゴン大学経済学部長に就任。1974年の大飢饉をきっかけに貧困者の救済活動を開始し、1976年に無担保でわずかな金を融資するNGO「グラミン銀行」プロジェクトを開始。1983年グラミン銀行創設後、マイクロクレジットを国内外で展開。マグサイサイ賞をはじめ、世界食糧賞、シドニー平和賞など数々の国際的な賞を受賞。2006年10月、貧困層の経済的・社会的基盤を構築した功績に対してグラミン銀行とユヌス氏にノーベル平和賞が授与された。



グラミン銀行（「グラミン」とはベンガル語で「農村」という意味）  
<http://www.grameen-info.org/>



## 知らないことがプラスに

グラミン銀行総裁のムハマド・ユヌス氏は、チッタゴン大学で経済学を教えていた1976年当時の体験を次のように語りはじめた。

経済学に関する問題を教室で解決できても、教室から一歩外に出ると、貧困に苦しんでいる人々があふれていました<sup>(※1)</sup>。教えている経済学が社会の役に立っていないことに疑問を持ち、学生たちと一緒に大学近くの村で調査を始めました。

しかし当初はマイクロクレジットの青写真はなく、どうすればいいのか、まったくわからないまま活動を始めたのです。ただ「何をしたいのか」だけははっきりしていました。Bangladesh という貧しい国で人々の手助けになるようなことをしたい、という目標だけは非常に明確でした。

ユヌス氏は学生を連れて大学のまわりの村を歩き、高利貸しからわずかな金を借りている多くの村人の存在を知り、返済期限を決めず、無担保で自身のお金を40世帯に貸した。

そんな活動を始めてから、お金を借りたい人々がより手軽に借りられるような状況をつくるために、何か制度的な方法を取れないものかと考え、銀行と話し合いをしましたが、「貧しい人にはお金を貸せない」と断られました。そこで銀行が貧しい人に融資をしないなら私が責任を取る、つまり私が銀行からお金を借り、必要な書類は私がすべて保証してサインし、貧しい人にお金を貸すという方法で始めました。銀行は私が間に入ることによって少しお金を出してくれると約束してくれましたが、事業に懸念を抱き、盛んに「貧しい人はお金を返してくれません」と忠告してきました。

それでも人々がお金を返しに来るのを見て非常に勇気づけられ、貧しい人々に対する無担保の小口融資をもっと定着させていこうと決意したのです。

マイクロクレジットは、既存の銀行の発想や経済学の理論とは一線を画している。ユヌス氏は、銀行の運営を知らなかったことがむしろプラスになったと語る。

1983年に「グラミン銀行」<sup>(※2)</sup>を設立するにあたり、1976年に私が村を連れて歩いた学生たちが参加してくれました。当初は私も学生たちも銀行の運営について何も知りませんでした。それでも全力投球し、自分たちだけで仕事をうまくやれるということがわかったわけです。

「その仕事を知らないからできない」と考えるのではなく、むしろそこに飛び込んで、自分が何をしたいのかを中心に前向きに考えていくことが大切です。物事を知らないことが、逆に幸運であるということもあり得るのです。知らないために、既存の枠にとらわれず、普通には考えられないようなことを試みるといったことが、プラスの要因として加わるわけです。



## 社会の利益のための事業

ユヌス氏は、貧困は個人の問題や能力不足ではなく、事業を始めるわずかな元金すら手にできない社会構造的な問題であると主張してきた。

貧困はその人の性格によるものではなく、私たちがつくりあげた社会のしくみ、利益優先の制度の中で、外から押しつけられたものという考え方です。貧困である人と裕福である人の人間的な違いはありません。

資金があれば、そこから何らかの仕事を始めてお金を手に入れ、貧困の悪循環から脱することができます。でも、現在の銀行は、こういった人たちにお金を貸せないような制度として成り立っています。そして企業ばかりでなく私たちの考え方も利益を最優先するような傾向になっています。しかし、お金だけを追求することが人間の存在価値でいいのか、と考え直すところに私たちはいま立っているのではないでしょうか。

ユヌス氏は、自身や企業の利益ばかりでなく、「社会の利益のための事業」という選択肢があることを示唆する。それは彼自身が拓いた道でもある。

現在、利益追求の活動が我々の生活の基盤になっていますが、実はもうひとつの活動があります。それは社会的利益のための事業です。私たちは「お金も儲けたいし、社会のためにも何かをやりたい」という両方の側面を一人ひとり



が持っているはず。それなら、どちらかに集中しないで両方あわせることも、ひとつの手段としてあるわけです。

まずニーズを発見し、新しい発想で提案し、可能かどうか何度も練り直してみる。そこからスタートしていくことがポイントです。



### 信用を維持するための方策

「人と人、国と国が信頼関係を築いていくために重要なことを教えてください」という問いに対し、ユヌス氏は次のように語った。

実は社会の中で「信用」というものは、もともと存在するものなのです。私たちはひとつのフレームワークを提示したことで、その信用を少し高めることができ、うまく利用できるよう少し手伝ったのです。

信用はもともと互いの関係、地域的な関係の中で存在しています。しかし現代社会は社会的なフレームワークから離れ、法的なフレームワークを基盤にしています。それは信頼関係を非常にうやむやにします。私たちが事業として目指したものは、社会的なフレームワークを築くことでした。人間的なつながりを支えるような制度があれば、信用は十分維持できるのです。

特筆すべき点は、融資の対象者が地域社会や家族の中で最下層である、子供を育てる立場の女性たちであったことだ。彼女たちは融資を

きっかけに、代々伝わる知恵を活かした事業を起こすなどして現金収入を得られるようになり、経済的に自立し、自分の地位を社会や家族の中で確立することができるようになった。

グラミン銀行では、融資を受けた人は5人でグループ(※3)をつくって話し合います。お互いの信用によって助け合うという制度をもとに金融面のサポートをしています。この5人のグループが最大で8つ集まると、それを地域的なひとつのセンター(※4)にします。そこで、また社会的な信用がシステムとして再確認されながら維持される、というプロセスを歩むのです。

ユヌス氏は融資を受けた家族の次の世代を支援(※5)するなど、ほかにも幅広く事業を展開している。注目したいのは、積極的にインターネットを導入し、貧しい人々への自立支援や生活の向上、教育に活用しようとしていることだ。

グラミン銀行以外で最も重要なプロジェクト「グラミンフォン」は、村の人々に携帯電話を提供することが目的です。マイクロクレジットの借り手に携帯電話を与え、彼女たちは村にいながらにしてテレフォンレディ(※6)になれるのです。そして今、貧しい家庭でもITが利用できるようにするために彼女たちをインターネットレディにすることを計画しています。

貧しい女性は自分の周り以外の世界へのアクセスの方法をまったく持っていません。

#### BOOK



ムハマド・ユヌス自伝  
ムハマド・ユヌス、アラン・ジョリ  
早川書房 [2000円+税]

貧しい人に無担保で少額融資をする「マイクロクレジット」という手法を編み出し、グラミン銀行を設立した「貧困なき世界を目指す銀行家」ムハマド・ユヌスの自伝。



グラミン銀行を知っていますか  
坪井ひろみ  
東洋経済新報社 [1800円+税]

グラミン銀行のマイクロクレジットをうまく活用しながら生活の質を高めようと懸命に生きる、 Bangladesh の貧しい女性たちの姿をリアルに伝える一冊。



グラミンフォンという奇跡  
ニコラス・P・サリバン  
英知出版 [1900円+税]

「途上国に携帯電話を普及させたい」と計画したイクバル・カディール。携帯電話会社「グラミンフォン」設立の夢に共鳴したムハマド・ユヌス。二人の挑戦の軌跡を描く。

ITは確実にその外部への扉を開きます。いったん開いてしまえば、彼女たちは自己責任で自分たちを高めることができるのです。

社会的事業の一環としてITへのアクセスをサポートすることで、彼女たちの子供はITに適應できるようになり、彼らの人生を変えていくことができるのです。ITの力で人々は素晴らしいアイデア、ビジネスプラン、革新的な発明などを思いつくでしょう。

現在、子供たちはようやく教育を受けられるようになってきました。インターネットはその助けとなっています。これ以外にもITによって提供されるものとして、銀行の設備やクレジットカードシステムなど非常に役立つことが数多くあります。

これらは特定のビジネスで儲けるという目的でなく、人々が直面している問題を解決するために日本企業ができることなのです。



### あなたの地球を あなたはどうしたいのか？

ユヌス氏は、講演の最後に、自分たちの地球の将来像を自分たちで考えることの重要性を強調した。

現在、世界の半分の人々が貧困にさらされています。いろんなところで戦争が起っています。こういった世界を我々は求め、満足しているのでしょうか？

それを考えるのは、私たち自身です。一人ひとりがどういった将来像を考えて何をするか。それを考えるところから小さな行動につながるのではないのでしょうか。

重要なことは、この地球はあなたの地球だということです。あなた一人の責任もかかっている地球です。誰かが何とかしてくれる、それによって生きていくことはありえないのです。自分と自分の地球の将来像を何らかの形で考えることは可能です。いろんなことを想像し、それをひとつの将来像として、いかにつなげていくのか。この想像力こそが、これからの私たちに最も必要なことでしょう。その想像力を皆さんにぜひ育てていただきたいと願っております。

Text by : 倉田 楽

※1 1974年の大飢饉による死者は約26,000人。

※2 1983年からバングラデシュ政府認可の特殊銀行として業務を開始し、1995年以降は外部資金に頼ることなく、完全に内部資金だけで運用されている。現在700万人以上の借り手があり、その97%が女性。返済率は99%に達し、現在80%のバングラデシュの貧困層がマイクロクレジットを利用している。ユヌス氏は「2012年までに貧困層の利用率を100%にする」と目標を掲げた。

※3 借り手(メンバー)になるためには、自身を含めて5人のグループ(同性で親戚以外)をつくらなければならない。1カ月の訓練期間を経て、最初の2人までが借りられる。5人のグループのうち融資を受けた者の返済が滞った場合、同じグループの他のメンバーは融資を受けられなくなる。

※4 5人でグループを組んだメンバーは「センター」と呼ばれる大きなグループに所属し、決まった曜日・時間に毎週集会を持つことが義務づけられている。その集会にグラミン銀行の行員が出向き、返済金の回収や貯蓄など銀行業務を行う。この集会が大きな意味を持ち、融資を受けて成功した人の中には、毎週の集会に参加するために現在でも融資を受けている人もいるという。

※5 子供たちが学校に継続して通い、学位を取得するための教育ローンの提供。「読み書きのできない家庭から完全に新しい世代をつくりたい。これはひとつの目標です」とユヌス氏は語る。

※6 「グラミンフォン」の携帯電話を村の人々が使用したい時に貸し出すサービスを担う、グラミン銀行の女性メンバー。このサービスは彼女たちの大きな収入源になっており、グラミン銀行ではテレフォンレディが携帯電話を購入できるよう特別ローンを提供している。

講演後、リンククラブのインタビューに応じてくれたユヌス氏

